



Title	アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 10, 17-40
Issue Date	2020-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77607
Type	bulletin (article)
File Information	02_17_40.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 言語類型論と北方諸言語研究]

アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

キーワード: 主要部後置、補文節、動詞複合体、証拠性、話法

0. はじめに

アルタイ型言語とは、亀井・河野・千野(編)(1996: 28-29, 499)による用語で、系統的なグループを指すのではなく、類型的なタイプを指す用語である。筆者は特に日本語やアルタイ諸言語をはじめとする言語に対して提案されたこのタイプのより精緻な解明を目指して取り組んできた(例えば風間(2012), 風間(2014))。本稿では、主に Haspelmath et al. (eds.) (2005) (以下では WALS) を用いてアルタイ型言語において相関する諸特徴を考察する。

1. 一貫した主要部後置型の言語とは — 特に「関係節」の位置を中心に

アルタイ型言語は SOV 語順と共に、[修飾語-被修飾語] の語順を持つ言語とされている(亀井・河野・千野(編)(1996: 29))。動詞を主要部と考えれば、この2つの特徴はさらに主要部後置(Head final)としてまとめることができる。

まず S と O と V の基本語順を扱った地図(Dryer (2005a) WALS [81])から、SOV 言語は地域的にみてヨーロッパと東南アジアを除くユーラシア、アフリカの一部、ニューギニアとオーストラリア、北米南米に多いことがわかる。語族的にはアルタイ諸言語の他に、カフカース諸語、ナイロ・サハラ諸語、ドラヴィダ語族、(インドの)印欧語族、チベット・ビルマ語族、パプア諸語、北米南米の諸語にわたっている。

次に、名詞と側置詞の語順を扱った地図(Dryer (2005b) WALS [85])を見ると、後置詞を使用する言語の分布は、SOV 言語のそれとほぼ重なり、一方、VSO 言語と SVO 言語は共に前置詞を使用していることがわかる。したがって側置詞の使用という観点から、まず SOV 型は VSO・SVO 型と対極をなす。

さらに属格と名詞の語順を扱った地図(Dryer (2005c) WALS [86])、および指示詞と名詞の語順を扱った地図(Dryer (2005d) WALS [88])をみると、細かな違いはあるが、SVO の基本語順の地図(Dryer (2005a) WALS [81])とよく似た分布を示していることがわかる。一方、形容詞と名詞の語順を扱った地図(Dryer (2005e) WALS [87])はやや異なった分布を見せ、関係節と名詞の語順を扱った地図(Dryer (2005f) WALS [90])では大きく異なった分布を見せることがわかる。

数値によってみると、属格名詞句前置の言語は調査対象の全言語のうちの 685/1,249 (54.8%)、指示詞前置の言語は 542/1,224 (44.1%) を占めるのに対し(ちなみに SOV 言語の比率は 497/1,228 (40.5%) である)、形容詞前置の言語は 373/1,366 (27.3%)、関係節前置の言語は 141/824 (17.1%) である。つまり形容詞は属格名詞句や指示詞より後置されやすく、関係節はさらに後置されやすいということがわかる。

このうち、まず関係節の位置について、Dryer (2005f: 391) は次のように述べている。

「もしある言語が VO 語順であれば、その言語はふつう関係節後置である」もしくは「もしある言語が関係節前置であれば、その言語はふつう OV 言語である」この含意法則は一方的である。したがってその逆（すなわち「もしある言語が関係節後置であれば、その言語はふつう VO 言語である」「もしある言語が OV 語順であれば、その言語はふつう関係節前置である」）は言えない。（中略）名詞に先行する関係節は OV 言語が一貫して左枝分かれ構造になることに寄与するが、形容詞は句をなさず一語であるので、枝分かれの方向に影響を与えない。

実際に、Dryer (2005a) (WALS [81]) と Dryer (2005f) (WALS [90]) の両地図を重ね合わせてその結果を観察してみると、VSO で関係節前置の言語は存在せず、SVO で関係節前置の言語は 4 つ（客家語、白語、広東語、北京語）しかない。なおこの 4 つの言語のうち白語を除く 3 言語は斜格項の位置についても調査対象全 1,074 言語の唯一の例外である (Dryer (2005g: 344))。したがってこの地図における「SOV でありかつ関係節前置の言語」(113 言語) が一貫して主要部後置型の言語（以下では「純主要部後置型言語」と呼ぶ）、すなわち、よりアルタイ型らしい言語ということになる。

2. 純主要部後置型と接尾辞型との相関

以下は佐藤 (1986: 191-192) による。

語順に関する一般原理

レーマンは、文の必須かつ中心的な要素としての動詞に、その目的語となる名詞を加えた構造が、最も基本的な統語構造であると考えている [Lehmann: 1973, 1978]。そこで、主語の位置とは無関係に、“VO 型”言語と“OV 型”言語という 2 つの類型が区別されることになる。ここで問題となるのが、この基本的構造が種々の要素によって修飾される場合の語順である。彼は、動詞を修飾する要素、名詞を修飾する要素の位置は、いずれも、被修飾要素である動詞と、その目的語の相対的順序に従って、すなわち、“VO 型”であるか“OV 型”であるかによって決定されるとする。その根拠となるのが、これらの修飾要素は、動詞と目的語からなる統語構造を決して中断することなく、「動詞修飾要素—動詞—目的語名詞—名詞修飾要素」、あるいは、「名詞修飾要素—目的語名詞—動詞—動詞修飾要素」という 2 つのパターンのいずれか一方に従って配列されるという仮説である。後者の語順を示す日本語は、この原則に完全に適合していることから、整合的 (consistent) な“OV 型”言語とされる。たとえば次の例において、形容詞、関係節といった名詞修飾要素は目的語名詞に先行し一方、使役や受身行為、あるいは願望などの法範疇を表す助動詞、また否定や疑問の標識といった動詞修飾要素は、動詞に後続している。

昨日買った 高い 本を 読ま せ られ たく ない か
(関係節) (形容詞) (目的語名詞) (動詞) (使役) (受身) (願望) (否定) (疑問)

上記のレーマンの仮説が正しいとすると、OV 型の言語は、動詞の文法カテゴリーを接尾辞で示す方が整合的なタイプである、ということになる。風間 (2014) でも行ったが、接頭辞型言語／接尾辞型言語の分布を調べた Dryer (2005h) (WALS [26]) の地図と、語順を扱った Dryer (2005a) (WALS [81]) を重ね合わせてみる。すると調査対象の全 876 言語のうち

で最も多いのは、「強接尾辞型 SOV 言語」であり、これは全体の約 1/4 を占める。4 番目に多いものに「弱接尾辞型 SOV 言語」があり、この両者を合わせた「強弱接尾辞型 SOV 言語」は全体の約 32% となる。この「強弱接尾辞型 SOV 言語」はヨーロッパとアフリカ南部、太平洋島嶼部の 3 地域を除く世界中に広く分布しているが、ユーラシア地域で圧倒的に優勢であることがわかる（この点についてはさらに下記で詳しく考察する）。

他方、「SOV と接尾辞型は相関関係にある」という仮説の反例となる言語をみると、まず SOV 語順であるのに強接頭辞型の言語は 4 言語 (0.05%) しかなく、ホカ語族のセリ語以外はナ・デネ語族の言語（チペワイアン、ナヴァホ、スレイヴ）である（なぜナ・デネ語族の言語に偏っているのか、その理由は今のところ不明である）。強接尾辞型言語であるのに VSO が基本語順である言語は下記の 10 言語 (1.1%) で、これは地域的にも系統的にも偏りが見られない。したがってここではこれらの言語を例外的な存在であると考えたい。

Strongly suffixing / VSO: Arabic (Modern Standard), Majang, Agta (Central), Lamang, Didinga, Gude, Bella Coola, Ik, Welsh, Squamish,

以上の検討から、接尾辞型であることと SOV 語順を持つことの間にはある程度相関があるとみてよいと考える。

ここではさらに「純主要部後置型」であり、かつ「接尾辞型」の言語がどのような地域に分布するどのような言語であるのかをみるために、[VO/OV と関係節の位置の相関]・[形容詞の位置]・[接辞の位置] (WALS [96, 87, 26]) の 3 つの地図をそれぞれ重ね合わせてみた。その結果、[OV・関係節前置・形容詞前置・強接尾辞型] になった言語は 68 言語得られた。ちなみに重ね合わせた地図において、このパターンは 2 番目に多いパターンであった（したがってこうした特徴の組み合わせはまさに「内的関連性を持つ特徴の束」である、ということが確認できる）。[OV・関係節前置・形容詞前置・強接尾辞型] になった 68 言語を、地域と言語系統から整理すると次のようになった。

[アフリカ]

中央コイサン・コエ語族(1) : Khoekhoe

アフロアジア語族・クシ語派 [エチオピア] (3) : Zayse (オモ), Kemant (中央クシ), Sidaama (高地東クシ)

[ユーラシア]

北東・北中カフカース(4) : Chechen, Tsova-Tush, Hunzib, Lezgian

印欧語族インド語派(2) : Lamani, Marathi

オーストロアジア・ムンダー(3) : Ho, Mundari, Korku

ドラヴィダ(5) : Telugu, Tamil, Kuvi, Kolami, Koya

チベット・ビルマ (西部) (12) : Bodo, Galo (以上 Baric), Tshangla, Limbu, Athpare, Khaling, Hayu, Tamang (Eastern), Newari (Kathmandu), Balti, Purki (以上 Bodic), Mising (Mirish)

ウラル(2) : Mansi, Khanty

チュルク(9) : Chuvash, Yakut, Uyghur, Karakalpak, Karachay-Balkar, Tatar, Bashkir, Uzbek, Turkish

モンゴル(4) : Kalmyk, Mangghuer, Dagur, Khalkha ツングース(2) : Even, Evenki

孤立(3) : Yukaghir (Kolyma), Korean, Japanese

[オセアニア・新大陸]

パプア(6) : Eipo (トランスニューギニア・メック), Awa (トランスニューギニア・東高地), Yareba (孤立), Kwoma (セピック語族・中央セピック), Alamlak (セピック語族・セピックヒル), Savosavo (ソロモン東パプア語族)

北米(1) : ペヌート語族・マイドゥ語派 : Maidu (Northeast)

南米(4) : ウイトト語族 : Huitoto (Murui), ウル・チパヤ語族 : Chipaya,
ケチュア語族 : Quechua (Imbabura), Quechua (Huallaga)

語族、地域共にきわめて限られていることがわかる。アフリカに 4 言語、パプアに 6 言語、新大陸に 5 言語あるが、その 15 言語を除く 53 言語はユーラシアにあり、カフカースからインド、中央アジアを経てシベリア、極東に至っている。いわゆるアルタイ諸言語は 15 言語あり最大で、チベット・ビルマ語族の 12 言語がこれに次ぐ。

以上、本節では一貫して主要部後置型の言語が真のアルタイ型言語であると考え、特に関係節の位置を基準としてこのタイプの言語の系統的・地理的分布を探った。

3. 「補文節」等における SOV 型言語と SVO 型言語の違い — 主要部後置語順優先型と〔動詞-直接対象目的語〕近接優先型

風間 (2017) では、主要部内在型関係節 (以下内在節) に関して、内在節を持つ言語では、知覚動詞などでも同じ構文が観察されることを指摘した (なお内在節を持つ言語はもっぱら SOV 語順を持つ言語であることも指摘されている : 同じく風間 (2017: 3-4) 参照)。

これに対し SAE (Standard Average European : Haspelmath (1998) などを参照) をはじめとする VO 語順の制約の厳しい欧米の印欧語において、知覚構文は一般的な補文を取らず、思考動詞等の構文との違いを見せる (『語研論集』23 号のデータを参照)。筆者はその理由を、これらの言語が「補文的内容の中にその動作主としての具体的な知覚対象 (特に人間) があり、それを目的語にできる可能性があれば、できるかぎりそれを目的語にする」という傾向を持っているためではないかと考えた。関連する記述として、Haspelmath (2001: 79) は「SAE の諸言語は言及優位 (reference-dominated) の傾向にあり、主語と目的語の関係は、意味役割よりも、主題性や語用論的要素に関連するものによって決定されている」と指摘していることが注目される。すなわち、そもそも SVO 語順の言語は他動詞優勢であるが (風間 (2019: 155-162))、さらに V と具体物としての O を接近させようとする傾向がある (この点に関しては先の 2 節でもレーマンによる説を紹介した)。これはもし補文構造の方を基底とみなせば、一種の昇格 (raising) とみることもできるだろう。

このことは①知覚構文、②外在型/内在型関係節、③ (体の) 部分などへの働きかけにおける全体と部分の選択、に共通して、SOV 型言語と SVO 型言語の違いとなって現れていると考える。日本語では従属節内や所有構造の中の SV や [修飾語-被修飾名詞] の語順がそのまま保たれていることに注目されたい。以下では英語と日本語の例によって説明する。

①知覚構文

英：I have seen him run away. (*I have seen that he ran away.)

日：私はその人が走って行くのを見た。(cf. ?私は走って行くその人を見た。)

②外在型／内在型関係節

英：I ate the apple which was on the table.

日：私はリンゴがテーブルの上にあったのを食べた。(cf. 私はテーブルの上にあったリンゴを食べた。)

③部分への働きかけにおける全体と部分の選択

英：I hit him on the shoulder. (?I hit his shoulder.)

日：私は彼の肩をたたいた。(cf. *私は肩のところから彼をたたいた。)

これに対し、思考動詞などでは、思考内容というものが具体的な対象ではないため、その思考内容の主語を目的語にすることはできず、SVO型の言語では補文節をとる言語が多い。ただし思考動詞においても補文標識という目的語をとり、これと同格にすることによって知識の内容を示していることに注意しておきたい。

英：*I know him come here in this morning. I know that he came here in this morning.

日：私はけさ彼が来たことを知っている。(cf. #私はけさ来た彼を知っている。なお#は左記の文とは異なった意味になってしまうことを示す。)

上記のような①～③における英日の構文の違いは次のような原因によるものと考えられる。すなわち、後ろから修飾する長い語句では、それがどこで終わるのかを示すことが難しく、文的な要素をそのまま目的語等にすることが難しいSVO型の言語と、文的な長い語句でも主要部後置の特性から従属節の範囲の把握が聞き手にとって容易であり、長い語句を容易に項にすることのできるSOV型（特に純主要部後置型）の言語の違いであると考えられる。見方を変えれば、主要部先行型のSVO型言語では、そのSVOの骨組みをなるべく簡潔な形で文の先頭において示そうとするのに対し、SOV型言語（特に純主要部後置型）では、従属節の中に主節の動詞にとっての直接の対象が存在する際に、SOV・[修飾語-被修飾名詞]の語順を乱してでもその対象を主節の動詞の直前の位置、すなわち従属節の右側に移動しようとはしないという違いであるとみることができる（ただし②の内在節／外在節の選択では、SOV語順の言語においても、外在節の方が一般的に使用されるようである）。つまり純主要部後置型の言語では、主節／従属節の別を問わず、さらに主節と従属節をつなぐにあたって、主要部後置を順守することがわかる。なおここで上記の①～③の英日の例文を見直してみると、英語ではたしかに直接の対象が動詞の直後に位置しているものの、日本語では①および②の主要部内在型の文において、直接の対象は動詞の直前に位置していないことがわかる。したがって2節でみたレーマンの仮説は、SVO語順の言語には良くあてはまるものの、SOV語順の言語においては必ずしも常に当てはまるわけではないと考える。

4. 接尾辞型言語の動詞複合体と接頭辞型言語の動詞複合体の性格の違い

Bybee (1985)の研究にあるように、動詞複合体があった場合に、一般に文法カテゴリーは語幹に近い方から、[動詞語幹-ヴォイス-アスペクト-テンス-モダリティ-人称]、のような順

序をとるとされている。南 (1989: 1685) も日本語の動詞の文法的カテゴリーがより客観的なものから、より主観的なものへといった順序をとることを指摘している。朝鮮語やモンゴル語などの他の SOV 型、すなわちアルタイ型言語の動詞複合体もおおむね似たような構成になっている (風間 (1992: 255-257))。これは後ろ寄りに位置する文法カテゴリーほどそのスコープが大きく、その内側全体に外から働かなければならないため、必然的により外側になければならない (もしくは歴史的にも外側へ移動して来た) ものと考えられる。

もしこのことが全く逆の語順の言語でも起きるとすれば、VSO 語順や SVO 語順の言語で先のもとの鏡像関係になった動詞複合体、すなわち [人称-モダリティ-テンス-アスペクト-ヴォイス-動詞語幹] のように文法カテゴリーの並ぶ動詞複合体が形成されるはずである。2 節でみたレーマンの説に従えば、整合的 OV 言語が [O V-suf-suf-suf-suf] のようになるなら、整合的 VO 言語は [pref-pref-pref-pref-V O] のようになるはずである。しかし通言語的に、接頭辞よりもはるかに接尾辞の方が好まれる、という傾向がある。Dryer (2005h) (WALS [26]) の地図にみるように、強接尾辞型言語 406/894 (45.4%) に対して、強接頭辞型言語は 58/894 (6.5%)、強弱接尾辞型言語合計が 529/894 (59.2%) であるのに対して強弱接頭辞型言語合計は 152 (17%) である。したがって単純な鏡像関係が成り立つとは思われない。

そこでいくつかの接頭辞型言語の動詞複合体の実際を見てみると次のようである。Dryer (2005h) (WALS [26]) によれば、下記の言語のうち、バントゥー諸語の多くは強接頭辞型、北西カフカースのウピフ語、アプハズ語は接頭辞接尾辞両用型、タナクロス語、スレイヴ語などアサバスカ諸語は強接頭辞型、チヌーク語は弱接頭辞型、アイヌ語は接頭辞接尾辞両用型に分類されている。なお以下の五つの (諸) 語がいずれも名詞の側に格を持たない主要部標示型の言語であることも注目に値する。

1) バントゥー諸語 (米田・小森・神谷 (2012: 154))

主語-時制-目的語-語根-派生-末尾辞

2) 北西カフカース諸語 (中川 (1992: 994-995))

{主語-目的語 / 目的語-主語} -同伴-場所-使役-語根-時制-叙法

3) アサバスカ語 (箕浦 (1992: 135))

拘束後置詞-副詞的要素-目的語-副詞的要素-モード-主語-類別辞-語根-時制・相-後倚辞

4) チヌーク語 (宮岡 (1989: 731))

時制-人称 (主・目・間接目) -所有関係-副詞的格関係-方向辞-語幹-副詞的 (相・時制、叙法、使役性、場所)

5) アイヌ語 (中川 (2003: 216))

人称 1 (主・目) - [再帰 / 相互 / 不定] -語幹-数-使役-人称 2

これらの動詞複合体を見ると、アルタイ型の動詞複合体とはその構成が大きく異なっていることがわかる。まず接頭辞型でも時制は接尾辞によっている言語がある (北西カフカース諸語とアサバスカ語)。方向や場所などの副詞的要素がよく観察される (北西カフカース諸語とアサバスカ語、チヌーク語)。そして最も重要と思われることは、どの言語の動詞複合体の接頭辞部分でも、主語と目的語の両方の人称を標示する点 である (なおアイヌ語の [人称 2]、すなわち動詞に後続する自動詞の一人称複数 (千歳方言で -as) ならびに自動詞

の四人称（千歳方言で *-an*）を示す人称要素は自立性が強く、おそらく動詞から新しく発達したものであるという（奥田（2015: 33））。

この点を確認するために、接辞の位置を扱った Dryer (2005h) (WALS [26]) と動詞における人称標示を扱った Sierwierska (2005) (WALS [102]) の両地図を重ね合わせてみよう。すると強接尾辞型言語で A と P 両方の人称を標示する言語は 47/123 (38.2%) であるのに対して、強接頭辞型言語で A と P 両方の人称を標示する言語は 12/19 (63.2%) もある。強接尾辞型言語で人称を全く標示しない言語は 30/123 (24.4%) あるが、強接頭辞型で人称を全く標示しない言語は 1/19 (5.3%) しかない。

バントゥー諸語は西アフリカの孤立型の諸言語と系統を同じくしており、アサバスカ諸語はサビアが指摘したように孤立語的な性質を有している（箕浦（1992: 131））。想像の域を出ないが、筆者はこうした接頭辞型がかつては孤立型の言語であって、その文の構造が凝縮して上記のような接頭辞型の動詞複合体が形成されたものと考え。アサバスカ語の語の構造は、「心理的にだけでなく、アメリカではあまり例はないが、形態的にも文の縮小模型」であるとサビアは述べているという（箕浦（1992: 141））。さらにアルタイ型の動詞複合体が 6 節で引用する 亀井・河野・千野（編）（1996: 499）にあるように「必要に応じて接辞を添加しうる、きわめて拡散的な形成を行なう」タイプ（創出型）であるのに対し、アサバスカ語やアプハズ語（北西カフカース諸語）の動詞複合体は現れる接辞の数に上限が決まっているいわゆるスロット型である（宮岡（1992: 22-23））という違いもある。

5. 基本語順と証拠性および認識モダリティの表現の位置の関係

Aikhenvald (2004) において証拠性を示す言語の例を見てみると、SOV 語順の言語の例が圧倒的に多いことに気づく。しかし Aikhenvald (2004: 8) は「証拠性は、特定の言語に限られない：融合型・膠着型・孤立型；統合型・複統合型などの類型的特徴との相関はほぼない。証拠性の存在と欠如のいずれも、主要部標示・従属部標示かどうかには依らない」として、何らかの類型的特徴と証拠性の存在の間の相関を否定している。他方で、証拠性は地域的な特徴であるとみなし、「証拠性の体系がよくみられる言語がよくみられる地域は南アメリカ・北アメリカで、インド諸語、コーカサス、チベット・ビルマ語族の言語にもよく見られる」としている（De Haan (2005) (WALS [77]) の地図における分布も参照）。なお他方で Aikhenvald (2004: 10) は「証拠性は言語接触によって容易に拡散する」とも述べている。

そこでまず De Haan (2005) (WALS [77]) と Dryer (2005a) (WALS [77]) の語順の地図を重ね合わせてみると、以下のような結果を得た。まず最も多いのは SOV 語順で間接証拠性のみを示す言語 (59/322) だが、これと 4 番目に多い SOV 語順で直接間接の証拠性の対立を示す言語 (34/322) を足すと全体の 28.9% に達する。他方、SVO でいずれかの証拠性を有する言語は 25/322 (7.8%)、VSO でいずれかの証拠性を有する言語は 17/322 (5.3%) である。したがって筆者は語順と文法カテゴリーとしての証拠性の有無の間にはある程度の相関があるものと考え。地域的にみると、基本的にヨーロッパを除くユーラシアから北米南米に連なる分布となっている。

ではなぜこのような偏りがあるのだろうか？ Aikhenvald (2004: 10) は「すべての言語が情報源に言及する語彙的な手段をもっているが、すべての言語が文法的な証拠性をもって

いるわけではない。語彙的手段をもつのはおそらく普遍的である。英語：I guess, they say, I hear that, allege (e.g. the alleged killer of X), reportedly; it seems to me that, ロシア語：伝聞の助詞 jakoby, mol, deskatj」と述べている。したがって、証拠性を持つ言語とは、証拠性を独立の語彙によってではなく、接辞や接語など何らかの文法化した手段で示す言語ということに他ならない。上記英語の I guess, they say, I hear that のような形式を見ればわかるように、証拠性は、ある命題の情報を別の観察者が得る、という構造になりがちなために、その命題内容の外側に来る必要がある。先に見た動詞複合体においても、より外側に現れるべき形式であると考えられる。実際に日本語の「ソウダ」、「ミタイダ」などの形式はテンスの屈折形式の外側に現れている。したがって英語のような SVO 語順の言語では、I guess, they say, I hear that のような要素が文法化して動詞や助動詞の前に前接語や接頭辞となつてつく必要がある。しかし先に見たように通言語的に接尾辞の方が圧倒的に優位であり、さらに英語のように pro-drop ではない言語では証拠性の観察者（主に 1 人称）は文法化したり縮約したりすることが難しいのではないかとと思われる。風間 (2019: 142-164) で述べたように、SVO 語順の言語における S は主題兼主語になりやすく、SV の構造が情報構造上の主題を示すために機能している。そのため（例えば英語でみると He must have been V-ed... のように助動詞類がいくつも現れることもある¹が）文頭の SV の構造をなるべく簡素な形で示す必要があると考えられる。したがって SVO 語順の言語では文法カテゴリーとしての証拠性を持つ言語が少ないということの理由は説明できる。

もしこのことが正しいとすれば、やはり動詞複合体の外側に位置すると考えられる認識的モダリティ（推量の「ダロウ」のような要素）においても同じことが言えるだろう。そこで次に Van der Auwera and Amman (2005) (WALS [75 Epistemic Possibility]) と Dryer (2005a) (WALS [81]) の語順の地図を重ね合わせてみた。するとここでも最も多いのはモダリティは接辞で示す SOV 語順の言語 (45/214: 21%) であり、次に多いのは独立語の動詞や助動詞を用いる英語のような構造の SVO 語順の言語 (35/214: 16.4%) となっている。地域的にも偏りがあり、モダリティは接辞で示す SOV 語順の言語はユーラシア、北米、ニューギニアに多いのに対して、独立語の動詞や助動詞で示す SVO 語順の言語はヨーロッパ、西アフリカ、東南アジア大陸部に多く分布している。他方、独立語の動詞や助動詞による構造の SOV 言語はインド、エチオピア、北西カフカースなどに存在している。インドの印欧語やエチオピアのクシ諸語は周りの言語からの影響などによって SOV 語順に変化してきた言語であり、認識モダリティの文法化/接辞化はその語順の変化に追いついていないとみることができる。以上のように、証拠性や認識的モダリティが接辞などに文法化している言語は、SOV 語順の言語に偏っており、この 2 つの特徴の間には内的関連性があることをみた。

¹ いくつも現れてはいるものの、これらの要素が全て語であって、接語や接辞に文法化していないことにも注目したい。音的に縮約した形式になる場合でも、've (<have) や 'll (<will) のように、後ろの語にもたれかかる接頭辞になるのではなく、前の語にもたれかかることも興味深い。これはやはり接尾辞が通言語的に優位であることから説明できるだろう。

6. アルタイ型と照応型は対立するのか？ — 拡散型 vs. 集約型、単肢型 vs. 両肢型、従属型 vs. 同格型

亀井・河野・千野（編）（1996:499）は河野六郎博士の筆によるものと思われるが、そこでは印欧語やバントゥー語などの照応型の言語と対比して、アルタイ型言語という類型を提示している。少し長くなるが下記に引用する（下線は筆者による）。

翻って、わが日本語はどんな類型の言語であろうか。（中略）動詞（用言）の方は、語幹にいろいろの接辞が付きうる膠着的形成を示す。ただし、この膠着形成は、グルジア語やバントゥー語とは性格が違う。たとえば、行くという活用語尾だけを伴う語幹の形から、行カ・ナイ、行キ・タイ、行キ・タク・ナイ等々を経て、行カ・セ・ラレ・タク・ナカツタなどのような多くの接辞の接合した、語というにはあまりに複雑な構成体（用言複合体）に至るまで、印欧語の語のように集約的でなく、必要に応じて接辞を添加しうる、きわめて拡散的な形成を行なう。そして、その添加は、語幹に接辞を加えて新しい語幹をつくり、その語幹に接辞を加えてさらに新しい語幹をつくり、最後に活用語尾が付いて完成するのであって、派生に派生が加わっていくのである。そして、その派生は語幹に限定を加えていく。したがって、グルジア語のように、常に一定の文法範疇に応じて語をつくり上げるのではなく、限定の必要に応じて接辞を加えるのである。この日本語の統語的特徴は、一つは、名詞の限定関係において、印欧語などのように限定辞と被限定辞とが同格におかれるのではなく、限定辞は常に被限定辞に先行し、被限定辞に従属的な関係をもつことである。より具体的にいえば、限定辞となる用言（形容詞・動詞）はいわゆる連体形（体言すなわち名詞に接続する形）をとる。それは、あくまでも被限定辞に従属することを形の上で明示するのである。一方、文をつくる統語関係では、（中略）すなわち、印欧語などのような、主語と述語を必須とする両肢言語ではなく、述語一本槍の単肢言語である（→単肢言語と両肢言語）。そして、主語はここでは補語として、すなわち主辞的補語として示される。たとえば、行くだけで十分1つの文ともなりうるが、もし限定が必要であれば、私ガ行くというふうに言う。この主語可欠の特徴は、動詞が人称変化を行なわないことにもよく現われている。だいたい、この言語の文の構成は、印欧語などの主述照応とは異なり、主題となるものをまずとり上げて、それについての述語がその限定辞を伴いつつ述べられる形をとる。すなわち、印欧語などの論理的な主述構造ではなく、心理的な FSP の構造をとる。そして、統語論的に重要なことは、日本語の述語動詞は、文の最も最後に位することである。

以下では上記の引用中に下線で示した「集約型」と「拡散型」、「照応／一致」と「従属／修飾」、「同格型」と「従属型」の違いについて WALS を用いて分析して行くことにする。なお以下では「照応／一致」を「一致」に、「従属／修飾」を「修飾」の用語に統一する。

6.1. 集約型と拡散型

5 節で考察したように、SVO 語順の言語では、①一般に接頭辞より接尾辞はるかに優勢なこと、②SVO か SOV かを問わず、O と V は隣接し、間に余計なものなるべく入らないようになっていること（レーマンによる説明、2 節参照）、③情報構造と主述構造の二重の標示の制約上、文頭の SV をなるべく簡素な形で示す必要のあること、の3つの理由から、SOV 接尾辞型言語（つまりアルタイ型言語）におけるような動詞複合体と鏡像関係になるような接頭辞の多用による動詞複合体は形成しづらい、ということを仮説として提案した。

今ここで8通りの(相補的な)文法的な違いをある語に標示しなければならないとした場合、文法カテゴリーそれぞれに対し標示があり長い複合体を形成するようなSOV接尾辞型言語では、これをO[V語幹](-a)(-e)(-o²)のように統合的/連辞的に標示することが可能である。この時、aeoの各要素は任意で、これがない場合、ā(aでない)などの意味を示すことになり、2³で8通りの違いを標示することができる。他方、SVO型言語では上述のように(接頭辞を多く含むような)長い複合体を作ることはできないので、連合的に対立する8つの接辞(例えばp, q, r, s, t, v, w, x)を用意し、それらがそれぞれ先のaeoを用いた場合に[]のような意味を表わすことにすれば、接辞のスロットは一つで済む:p[aŋeŋo], q[aŋeŋō], r[aŋeŋo], s[āŋeŋo], t[āŋeŋo], v[aŋeŋō], w[āŋeŋō], x[āŋeŋō]。この場合、否定的な意味内容(āやē, ò)も一定の形式をとることになるので、その選択は義務的なものとなる。つまりSOV接尾辞型言語は統合関係において長く**拡散した任意の**標示形態を示すのに対し、SVO型言語はp~xの大きな連合的対立による**集約した義務的な**標示形態を示すことになる。実際にたとえばロシア語のja ponja-l。「私(男)は理解した」の文における-lは男性・単数・過去の3つの機能が集約した標示となっている。他方、日本語の「私は来-たくな-かった」の述部は2語であり語末の文法カテゴリー(テンス)は必須であるものの、願望、否定、といった任意の要素が拡散的に接続している。拡散した任意の標示形態とは、言い換えれば膠着的ということであり、集約した義務的な標示形態とは屈折的ということを意味する。

このようにSOV接尾辞型言語が拡散型、SVO型言語が集約型(もしくは無標示型)に{なる/ならざるを得ない}ことは、内的関連性のあることとして説明が可能であると考えられる。

6.2. 一致と修飾

もしSVO型言語が一致を好むということがあれば、一般に多く一致に用いられていることが観察される文法カテゴリー、すなわち性や数、などはSVO語順の言語に多く、SOV語順の言語には少ない、ということが予想される。

そこで(文法)性を持つ言語の分布に関する地図であるCorbett(2005)(WALS[32])と語順の地図(Dryer(2005a)(WALS[81]))を重ね合わせてみた。すると最も多かったのはSOVで性なしの言語(63/221(28.5%))で、次がSVOで意味的形式的両方の性を持つ言語(26/221(11.8%))、三番目に多いのがSVOで性を持たない言語(26/221(11.8%))で、この3者で全体の52%を占める。予想に反しSOV語順であるのに意味的形式的両方の性を持つ言語は15(6.8%)ある。その言語はTsez, Arbore, Qafar, Tigré, Pashto, Marathi, Panjabi, Amharic, Beja, Iraqw, Lavukaleve, Khoekhoe, Oromo(Harar), Hindi, Supyireであるが、このうち下線の言語は南アジアの印欧語、二重下線の言語はアフロアジア語族のエチオピア周辺のセム語派かクシ語派の言語である。このように一部例外はあるが、SVO語順と一致の文法カテゴリーとしての性の存在はかなり相関していることがわかった³。

² a, e, oの3文字を選んだことには特に意味はない。ā(「aでない」ことを意味する)などの文字を使用するための便宜上の措置である。

³ ただし元朝秘史蒙古語には一致を伴う性の文法カテゴリーが存在していた(栗林(1992:523))。さらに一致の文法カテゴリーとして「数」についても若干調査してみたが、これについてははっきりした結果が出なかった。このような点についてのさらなる精査・検討はなお今後の課題である。

6.3. 複文の形成にみる同格型と従属型

次に亀井・河野・千野（編）（1996: 499）のいう「同格」と「従属」の違いを取り上げる。後述するが、同格関係に基づく「（関係代名詞による）関係節」を持つ言語は、関係節が名詞に後続する言語に偏っている。

Comrie and Kuteva (2005) (WALS [122-123]) は「関係節化」の手段に4つのタイプをあげ、世界の112の言語でのその使用を調査している。以下に4つのタイプを疑似日本語によって示し、その言語数を：の後ろに示す。

- ①関係代名詞型：[私は少女を教えている、その誰かがちょうど私たちに挨拶した。]：12
- ②削減なし型：24
 - ②(1)相関型：[私は少女を教えている、少女がちょうど挨拶したの(を)。]
 - ②(2)主要部内在型：[私は少女がちょうど挨拶したのを教えている。]
 - ②(3)並列型：[少女がちょうど挨拶した、(彼女が／少女が)私に教えられている。]
- ③代名詞残存型：[私は彼女がちょうど挨拶したところの少女を教えている。]：5
- ④ギャップ型：[私はちょうど挨拶した少女を教えている。]：125

Comrie and Kuteva (2005) は上記のタイプの地理的分布に関して、①が印欧語族の言語の中でもヨーロッパの言語に限られることを指摘している。ヨーロッパ以外ではグルジア語と北米のアコマ語しかなく、関係代名詞というものが世界的・類型論的にみるときわめてマイナーなものであることに驚かされる。データをみる限り④ギャップ型が世界的に圧倒的に優勢であり、②削減なし型はもっぱら新大陸に、③代名詞残存型はもっぱらアフリカに分布している。

Comrie and Kuteva (2005) は明言していないが、関係代名詞を使用する言語は、関係節が名詞に後続する言語に偏っている。「関係節化」の方策に関する地図である Comrie and Kuteva (2005) [122] と関係節と主名詞の語順に関する地図である Dryer (2005b) [90] を重ね合わせてみると、関係節後続で関係代名詞を使う言語が10であるのに対し、関係節先行で関係代名詞を使う言語は0である。最も多いのは関係節後続でギャップ型の言語(74)、次に多いのは関係節先行でギャップ型の言語(20)である。日本語や朝鮮語、アルタイ諸言語は全てこの関係節先行でギャップ型の言語となっている。

『語研論集』23号では、下記の例文を含む調査例文を用いて、25言語のデータを収集した。本節ではまずそのデータに基づき、(主にヨーロッパの)SVO型言語と(アルタイ諸言語を中心とした)SOV型言語の複文の構成の違いを確認する。なお本節の下記の記述は、風間(2018)の記述と一部重複していることをことわっておく。

- 《1》私が昨日買った本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]
- 《2》ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]
- 《3》あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]
- 《4》私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]
- 《5》昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]
- 《6》私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

《7》(昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った。／(昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った。[補文節・直接発話／間接話法]

下記の表1に言語ごとの複文の構成を示した。

表1: 複文の構成の違い

	《1》内 目的語	《2》外 「音」	《3》外 「噂」	補文節			《7》引用 間接話法
				《4》視覚	《5》聴覚	《6》知識	
ドイツ	関代	INF / 補 how	補	INF / 補 how	INF / 補 how	補	補
アイスランド	関代	INF	補	INF	INF	補	INF
フランス	関代	INF	補	INF	INF	補	補
イタリア	関代	INF / 補	補	INF / 補	INF / 補	補	補 / 前 INF
ロシア	関代	補 how / N	補	補 how	補	補	補
ブルガリア	関代	補 how / N	補	補 how	補 how / da 構文	補	補
タタール	PTCP	動名詞	PTCPトウ	PTCP-ACC	PTCP-ACC	PTCP-ACC	補/《言って》
モンゴル	PTCP	PTCP	PTCPトウ	PTCP-ACC	PTCP-ACC	PTCP-ACC	《言って》
ソロン	PTCP	PTCP	PTCPトウ	PTCP-ACC	PTCP-ACC	PTCP-ACC	《言って》 / PTCP-ref
ナナイ	PTCP	2文	2文	PTCP-ACC	PTCP-ACC	PTCP-ACC	《言って》
朝鮮	連体	連体	連体トウ	連体ト-ACC	連体ト-ACC	連体ト-ACC	《言って》
日本	連体	連体	連体トウ	連体ノ-ACC	連体ノ-ACC	連体ト-ACC	ト

表1における略号は以下のとおりである。なお今回の目的に沿って上記の両タイプの違いが明確になるよう、いくつかの言語のデータは省いた。印欧語族のうち、ゲルマン系2言語、イタリア系2言語、スラブ系2言語、アルタイ諸言語のうちチュルク系1言語、モンゴル系1言語、ツングース系2言語、朝鮮語、日本語をとりあげている。

関代：関係代名詞、補：補文標識 (how とあるものは英語の how にあたるものを使用)、前：前置詞、《言って》：歴史的もしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから形成された引用節標識、da 構文：バルカン言語連合の特徴である接続法による表現、トウ・ト：日本語の「という」「こと」に機能的に対応する形式、2文：複文によらず、単文を2つ使用した場合、ACC: accusative, INF: infinitive, N: noun, PTCP: participle, REF: reflexive 語順について記しておく、表1の言語のうち、ドイツ語はいわゆる定形第2だが、主節ではSVOとなることが多く、アイスランド語、フランス語、イタリア語は基本的にSVOである。ロシア語とブルガリア語の語順はかなり自由だが、SVO語順の頻度は最も高い。なお実際の例文に関して詳しくは『語研論集』23号を参照されたい。

寺村によるいわゆる外の関係の連体修飾は、SAE などでは一般に補文標識などによって示され、内の関係の連体修飾、すなわち関係節とはその表現方法において断絶している（表1における《1》と《2》の間の太線部分）。他方、こうした言語では「知っている」、「思う」などの知識・思考の動詞がとる補文節や「言う」などの言語活動の動詞がとる引用節も同じ要素によって示される。一部の言語では「見る」、「聞く」などの知覚動詞がとる補文節も同じ要素によって示される。VO 語順の厳密な言語の場合、《2》《4》《5》のように視覚や聴覚によって知覚されるべきことでは、直接の具体的対象を目的語にし、行為は不定詞となる（表1中の中太線で四角に囲った部分⁴：3節参照）。

他方、上記の④ギャップ型を用いる諸言語（アルタイ型言語はこの中に含まれる）の中には、形動詞や連体形が the Fact-S 構造⁵をはじめとする一連の表現における唯一の手段である言語が存在し、これが当該言語では一般的な名詞修飾の節構造であるという（Comrie and Kuteva (2005: 495)）。

上に述べたように、ヨーロッパの印欧語族の言語（基本的にVO言語）では、内の関係の連体修飾と、表においてその右側に位置する諸表現の間に大きな対立があり、右側の諸表現は主に補文によって示される。補文は一種の名詞化であり、《2》や《3》の場合それらは主名詞と**同格**の関係に立ち、引用や知覚・知識動詞の補語の場合それらは直接目的語相当である。

これに対し、アルタイ型の言語（日本語、朝鮮語、アルタイ諸言語など、基本的にOV言語）では、表の一番右の引用節とその左側に位置する諸表現が対立し（表1の《6》と《7》の間の太線部分⁶）、左側の諸表現はもっぱら連体形や形動詞を用いて示される。（外の関係など）連体的な場合、それは**修飾語**として機能し、引用や知覚・知識動詞の補語の場合それらは連体形や形動詞に格を付加することによって示される。

すなわち、両タイプの相違は表1における境界の位置が異なっているだけではない。VOタイプでは長い修飾語が主名詞に先行することが好まれないために、連体修飾複文の形成において修飾構造ではなく、後置した同格構造を用いる。他方OV言語では長い修飾語が主名詞に先行することも問題ないので、単文における形容詞の修飾などと同じ修飾構造を用いるものと考えられる。

補文節においては両タイプの間に大きな違いは起こらない。VO型言語は補文節をそのまま目的語とし、OV型言語は格を用いて目的語とする。ただしOV型言語の中ではさらに、形式名詞を用いるか、それとも用いないで直接格を接続するかの違い（朝鮮語・日本語と、アルタイ諸言語の違いである）はある。なおここまで記してきたように、欧米の諸言語を念頭に作られた「補文」および「補文節」という用語は、OV型言語では、欧米の諸言語のそ

⁴ 語順がより自由なスラブ諸語は、四角の中には入っていないことに注意したい。

⁵ Comrie (1998) や Comrie and Kuteva (2005) による用語。日本語では「外の関係の連体修飾」で示されるような意味関係を示す構造を指す用語である。

⁶ しかし《6》は「私はその人が昨日ここに来た**と**知っている」とも言える。《4》では「私はその人が走っていった**と**みた」という表現が可能であるが、「みた」にすでに視覚の意味はなく、意味は大きく変わってしまう。この境界は《6》と《7》の間でくっきりと切れるのではなく、連続したものであるのかもしれない。

れとは範囲も機能も異なるので、「補文」および「補文節」という用語を通言語的に用いることは正しくないと思われる。本稿では一旦便宜的にこの用語を広い意味で使用していることをことわっておく。

以上本節では、SAE を中心とした VO 言語とアルタイ型言語を中心とした OV 言語の間における複文の形成方法の範囲と対立の違いについてみた。その中で両言語群が示す「同格」と「修飾」の点に関する性格の違いにも触れた。

他方、補文節とは異なり、引用節では両言語群の違いが明確である。そこで引用節について、次の 7 節で考察する。

7. SOV 型言語の引用節における直接話法と間接話法の曖昧性

6.3. 節で分析したように、ヨーロッパの印欧語において、引用節は直接目的語となる。英語における動詞 *say* は他動詞として *that* 節をとり、その疑問は *What did you say?* となる。これに対し、日本語やアルタイ諸言語の多くにおいて引用節は副詞的にふるまう節であり、アルタイ諸言語の多くにおいて引用節の標識は歴史的もしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから発達した形式を示している（近畿や広島の方言にも「ゆうて（言うた）」のように同様の引用標識がある）。

筆者は、ヨーロッパの印欧語における間接話法で時制やダイクシスの調整が必要なのは、引用節が目的語である補文節であり、主節の動詞に直接支配されているためではないかと考える。これに対し日本語をはじめとするアルタイ型言語では必須項でないため、直接話法と間接話法の境界がはっきりしない可能性があると考ええる。

この節では、上記の筆者の仮説について、現時点で可能な限りの考察を行う。

7.1. 通言語的な先行研究における引用節の取り扱い方

ディクソン (2018: 8-9) は次のように述べている。

どの言語でも、動詞クラスに属する語は、広い範囲の行為や状態を表す。私が「意味タイプ semantic types」——その各々は、共通の意味成分と共有の文法的特性をもつ動詞クラスである——と呼ぶものを認めることは便利である。それぞれの意味タイプに関連する多数の「意味役割 semantic roles」がある。すべての言語に現れる動詞の意味タイプのいくつかは、次のようである（英語の例を用いる）。

意味タイプ	意味役割
作用 (AFFECT) e.g. hit, cut, burn	行為者 (Agent)、操作具 (Manip) 目標 (Target)
供与 (GIVING) e.g. give, lend, pay	供与者 (Donor)、贈物 (Gift)、受け手 (Recipient)
発話 (SPEAKING) e.g. talk, tell, order	話者 (Speaker)、聞き手 (Addressee)、 メッセージ (Message)
注意(ATTENTION) e.g. see, hear, watch	知覚者 (Perceiver)、印象 (Impression)

他動詞にとって、一つの意味役割は、A (他動詞主語：引用者註) の統語関係に結びつけられる。私にとって常に注目すべきことと思われるのは、世界中の様々な言語がここでなされている方法にかなりの一貫性があることである。ほとんど常に、A と見なされるのは、作用動詞にとっては行為者で

あり、供与動詞にとっては供与者であり、発話動詞にとっては話者であり、注意動詞にとっては知覚者である。その基礎にある原理は以下のものであると思われる：動作の成就に最も関係があると思われる役割は、A と見なされるだろう。これは無生物のものでも可能である（The wind wrecked the house 「風が家をもぎ取った」、The midday sun melted the butter 「真昼の太陽がバターを溶かした」のように）。最も頻繁に A と結びつく役割は人間であろう。それでその場合、「動作の成就に最も関係がある」ことは、「動作を始め、あるいは制御することができる」ことに等しい。

もし動詞が二つの中心的な役割をもっていれば、A と結びつかない方の役割は、O の統語関係として認められるだろう。（中略）一部の言語では、注意タイプ（ATTENTION type）は、他動詞の主要な文法クラスに関連せずに、異なる構文タイプに属している。例えば、ポリネシア語派のトンガ語では、知覚者（Perceiver）は自動詞の主語として標示され、印象（Impression）は与格で標示される。またアヴァール語のようなダゲスタン諸語では、知覚者は位格で標示され、印象は絶対格で標示される。

上記のように、ディクソン（2018）は「注意」タイプにはこれを他動詞でなく自動詞として扱う言語の存在を認めているが、「発話」タイプの動詞に関しては問題がなく世界中の言語で一貫して他動詞であり、メッセージは常に目的語であると考えているようである。たしかに英語において say は基本的にどの辞書でも他動詞として扱われており、補文節／that 節をとる構文は他動詞の用法の中に入れられている（直接話法による引用節をとる構文も同様）。しかし日本語における～ト引用節は目的語であろうか？ 筆者が知る限りでは、他の言語にも、メッセージが目的語として扱われているとは思われない言語が多く存在する。世界の言語には、「注意」タイプと同様に、「発話」タイプが自動詞である言語が一定数以上存在するのではないだろうか？ またそのような言語は類型的・地理的に偏りを見せる可能性はないだろうか？ 本稿ではまずアルタイ諸言語や日本語の先行研究についての引用節の記述をみることにする。

7.2. アルタイ諸言語の先行研究における引用節の取り扱い方

筆者の調べた限り、モンゴル諸語およびツングース諸語において、引用節に関する筆者の問題点についての記述は見いだせなかった。ここではトルコ語の引用節に関する記述をみる。

林（2013:244）では、de-「言う」の副動詞形の一つである diye 「と（言つて）」を引用文の後ろに後続させることにより、söyle-「話す」、konuş-「語る」、sor-「尋ねる」、düşün-「思う、考える」などの引用節を形成することができるとしている。この diye はオノマトペなどに後続して発話動詞以外の動詞とも共起するという：Kitap pat diye yere düştü. 「本はパタンと床に落ちた」（林（2013: 246））。他方、形動詞や動名詞に対格を接続することにより引用節を形成することもできる（林（2013:243））。diye による引用節は必須補語であるのか違うのか、diye による引用節は直接話法と間接話法の両方の解釈を許すのか、形動詞や動名詞の対格形は間接話法としての解釈しか許さないのか、などの問題については記述がない。

7.3. 日本語の引用節に関する先行研究

7.3.1. 廣瀬 (1988)

以下は廣瀬 (1988: 4-5) からの引用である。

そもそも日本語において英語の直接話法・間接話法にあたる区別が存在するのかどうかという問題から考えてみる。例えば次の文を見ると、引用部中の「僕」という語の解釈は二通りにあいまいである。

太郎は僕が東京へ行くと言った。

「僕」は太郎を指すこともできるし、話し手である伝達者を指すこともできる。この二通りのあいまい性は、英語では構文論上の違いとして表現可能である。

Taro said, "I will go to Tokyo." Taro said that I would go to Tokyo.

英語では、接続詞の *that* が用いられたり、時制の一致が生じている場合は、構文論的に間接話法であると同等することができる。(中略) 英語の間接話法引用部には一つの構文論的制約がある。つまり、間接引用部は、主語と述語を備えた完全な文の形をしていなければならない、というのがそれである。一方、直接話法引用部は完全な文の形をしている必要はない。したがって、John said, "Damn it!" は文法的だが、John said that damn it. はそうでない。(中略) 日本語では、引用部に一定の終助詞や助動詞が現れると、それが直接引用部であることを示す。

太郎は僕が東京へ行くよと言った。太郎は僕が東京へ行きますと言った。

これらの文で「僕」は太郎を指すことしかできない。

このように廣瀬 (1988) では日本語のトによる引用節において、直接話法と間接話法の区別が不明確なこと、モダリティ要素が現れると、引用節は直接話法としての解釈のみとなることが指摘されている(なお廣瀬 (1988) はさらに上記のモダリティ要素は、モダリティ要素の中でも働きかけのモダリティのそれであることも指摘している)。

7.3.2. 砂川 (1988)

砂川 (1988: 21) はトによる引用節とコトによる引用節がどのように現れるか、という点に注目して日本語の動詞を下記のように分類⁷している。下記では特に②の「トとコトで先行する節が異なる動詞」に注目したい。

①トとコトの入れ替え可能な動詞

医者は彼に手術をする必要があると告げた。 医者は彼に手術をする必要があることを告げた。

②トとコトで先行する節が異なる動詞

太郎は花子には会わなかったと否定した。 太郎は花子に会ったことを否定した。

太郎は花子に会わなければよかったと後悔した。 太郎は花子に会ったことを後悔した。

③トしかとれない動詞

1 音声の様態動詞: つぶやく、叫ぶ、喚く、怒鳴る、あえぐ、ささやく

⁷ 査読者の一人の方からは、砂川 (1988) の上記の分類に関してコメントをいただいた。すなわち「直感する」では「～コトを直感した」のような、「暗示する、匂わせる、ほのめかす」については「～ト暗示する」のような発話も可能ではないかというコメントである。本稿の主旨に直接かかわる問題ではないが、今後の引用節の研究の進展に関わる貴重な指摘であると考え、ここに紹介させていただくことにした。

- 2 発語媒介行為動詞：脅迫する、説得する、中傷する、言いくるめる
 - 3 思い込み動詞：錯覚する、思い違いする、思い込む、勘違いする、早合点する、早呑み込みする
 - 4 判断動詞：判断する、解釈する、見なす、直感する
- ④コトしかとれない動詞
- 5 失念動詞：忘れる、失念する
 - 6 暗示動詞：暗示する、匂わせる、ほのめかす、合意する (砂川 (1988: 21))

上記のような分類に基づき分析を行うにあたり、砂川 (1988: 20) は次のように述べる。

コトによる文はその文全体の話し手の場だけが成立しており、従って場の二重構造は認められない。(中略) 引用文は二重の場によって構成されており、引用句「と」は引用文全体の発言の場とは位相の異なる場を再現させている。それに対して「こと」を伴う文はそのような場の二重性を認めることはできないと言えるわけである。

砂川 (1988: 20) はさらに「「～こと」の句はそれが含まれる文全体の話し手が体験した出来事を、自らの中で対象化し、概念的に再構成した内容を表すもの」としている。筆者はこのことはすなわち、「～コトヲ」による引用節は間接話法となることを意味すると考える。

7.3.3. 藤田 (1988)

藤田 (1988) はトによる引用節について、これを必須補語とみなす立場と、副詞的修飾句の一種とみなす立場の両方があることを紹介した上で、藤田 (1988) 自身は副詞的修飾句の一種とみなす立場の方を支持している。すなわち、まず仁田 (1983)、森山 (1988) はいずれも「ト」を対象格として位置づけ、述語動詞「言った」「思った」の意味する発話・思惟の内容を示す必須補語としているという。他方、柴谷 (1978) は「ト」を引用標識と呼び、「(誠一郎が) おはようと (入ってきた)」の「おはよう」のような引用句と「パタンパタンと (倒れた)」のような擬声・擬態語を、ともに引用標識「ト」を伴って副詞的修飾句として用いられると考え、両者の共通性を強調しているという。

7.3.4. 日本語の引用節に関する先行研究のまとめ

日本語の引用節に関する先行研究の記述と筆者の考えをまとめると下記ようになる。

- ・トによる引用節は副詞的修飾句で、基本的に直接話法と間接話法の区別は明確ではない。
- ・コト(ヲ)による引用節は間接話法となる。

コト(ヲ)による引用節が必須補語であることを明言している先行研究は見当たらないが、対格ヲを伴っていることから、必須補語であることはおそらく自明であると考えられる。

7.3.5. 筆者自身による予備的研究

引用節に関しても、風間 (2018) で若干の予備的研究を行った。本稿では新たに得た情報を加え、その一部を紹介する。

以下の 1)~2)の文は、筆者⁸の内省においては、どちらも同じ意味で使用することができる。すなわち例えば 1) の「明日」と 2) の「今日」はいずれも発話時点における今日のことを示す⁹。

1) 「昨日オレは明日も来ると言ったよね」 / 2) 「昨日オレは今日も来ると言ったよね」

これに対し、「～（こと）を伝える」のように引用内容を形式名詞によって対格目的語とすると、主文の動詞による支配は強まり、間接話法的な解釈しか許さないようだ。3)の「明日」は「発話時点からみでの明日」のように感じられる¹⁰。

3) 「昨日オレはこの人に、明日も来るとを伝えましたよ」

4) 「昨日オレはこの人に、今日も来るとを伝えましたよ」

この問題について、モンゴル語（ハルハ方言、以下では単にモンゴル語と呼ぶ）に関して若干の聞き出し調査を行ってみた。話者の情報は次の表に示した通りである。

表 2: コンサルタントの情報

	コンサルタント	生年	出身地
モンゴル語	O 氏	1987	Ulaanbaatar
	J 氏	1989	Övürxangaj

モンゴル語では、まず下記の M-1) における *margaaš*¹¹「明日」と M-2) における *önödödör*「今日」はどちらも同じように発話時点からみでの「今日」を指すという。なおモンゴル語の *gež* は *ge-*「言う」の副動詞形である。

M-1) *öcigdör bi margaaš bas irne gež xelsen bizdee.*
「昨日 オレは 明日 も 来ると 言った よね」

M-2) *öcigdör bi önödödör bas irne gež xelsen bizdee.*
「昨日 オレは 今日 も 来ると 言った よね」

しかし日本語とは異なり、次の M-3) における *margaaš*「明日」も M-4) における *önödödör*「今日」もどちらも同じように発話時点からみでの「今日」を指すという。M-3) で発話時点からみでの「明日」を指すことはできないという。したがってモンゴル語においては、同

⁸ 筆者は 1965 年東京生まれの日本語母語話者である。

⁹ ただし（特に文脈が与えられれば）3) の「明日」が発話時点からみでの「明日」、つまり昨日の時点からみでの「明後日」を指すことも可能であると思われる。

¹⁰ 査読者から指摘をいただいたが、文頭に「昨日」があるこの文では、「明日」を「(昨日) 伝えた時点からみでの「明日」、すなわち発話時点からみでの「今日」と解釈することも可能かもしれない。話者により判断に違いが出ることも予想される。今後はアンケートなどにより、より客観的なデータを得ることも課題としたい。

¹¹ モンゴル語の翻字は次のような方式による： a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, e = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, ш = š, ъ = ", ы = y, ь = ', э = e, ю = ju, я = ja。なおモンゴル語の例文についてのグロスには逐語的な日本語訳によって代用する。

じ構文によって直接話法的な解釈も間接話法的な解釈も可能であるが、発話時点の状況に引きつけた解釈がなされやすいのではないかと考える。なお **ge-dg-ee** における **-ee** は再帰人称接辞であり、この引用節は対格目的語相当として機能していると考えられる。

- M-3) **öcigdör bi ene xünd margaaš bas irne ge-dg-ee xelsen.**
 「昨日 オレは この 人に、明日 も 来る ことを 伝えました」
- M-4) **öcigdör bi ene xünd önöödör bas irne ge-dg-ee xelsen.**
 「昨日 オレは この 人に、今日 も 来る ことを 伝えました」

なおモンゴル語の **gež** は、オノマトペと共に用いられることもあるという。

- M-5) **paacag paacag gež alxaž bajna.**
 「(赤ん坊が) ヨチ ヨチ と 歩いて いる」
- M-6) **šiver šiver gež boroo dusalž bajna.**
 「シト シト と 雨が 降って いる」

風間 (2018) ではツングース諸語の一つであるソロン語についても調査を行った。その結果はモンゴル語とよく似たものとなった。ただソロン語はモンゴル語の影響を強く受けた言語であり、これを以ってツングース諸語全体の引用節の性格を判断することはできない。

チュルク諸語については、菱山 (2018:233) にタタール語のデータをみることができる(なおグロスにおける略号はもっぱら Leipzig glossing rules にあるもののみである)。

- T-1) Ul **bügen üz-e-neŋ monda kil-gän-e-n**
 3SG today REFL-3SG.POSS-GEN here come-PTCP.PST-3SG.POSS-ACC
äyt-te.
 say-PST
 「(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った」
- T-2) “Min **bügen monda kil-gän ide-m” dip äyt-te ul.**
 1SG today here come-PRF COP.PST-1SG QUOT say-PST 3SG
 「(昨日) 彼は、『私は今日ここに来た』と言った」

間接話法は目的語となっているのに対し、直接話法は **dip** という副動詞形に拠っていることがわかる。**dip** による引用節が間接話法的にも解釈されるかどうかについては不明である。チュルク諸語の他の言語¹²についても今後さらに状況を研究して行く必要がある。

以上、今後のさらなる研究を必要とするが、日本語やモンゴル語をはじめとするアルタイ型言語の少なくともいくつかでは直接話法と間接話法の境界があいまいで、同じ構造の文が二様に解釈されうることをみた。これはアルタイ型言語一般において、引用節が必須補語ではなく、動詞に強く支配されている名詞項ではない、ということが原因であると考えられる。

¹² 江畑 (p.c.) によれば、サハ語でも文構造上は直接話法と間接話法が区別されず、イントネーションや句読法によってもっぱら区別されるとする研究があるという。

8. まとめと今後の課題

以上本稿では、語順を軸にアルタイ型言語において相関すると考えられる諸特徴を探ってきた。以下に節ごとの内容のまとめを示す。

・1 節のまとめ

アルタイ型言語とは、まず一貫した主要部後置型の言語（純主要部後置型言語）である。SOV 語順でも形容詞を後置する言語はある程度存在し、関係節を後置する言語はさらにずっと多い。こうした中で修飾要素は全て前置する純主要部後置型の言語は他の面でも多くの内的関連のある特徴を示さざるを得なくなるだろう。これが語順からみたアルタイ型言語の特徴である。

・2 節のまとめ

アルタイ型言語／純主要部後置型言語の言語と接尾辞型の言語の間には相関関係があり、このことはレーマンの一般原理によって説明される。

・3 節のまとめ

〈1〉知覚構文、〈2〉外在型／内在型関係節、〈3〉(体の)部分への働きかけにおける全体と部分の選択、の3種類の表現において、アルタイ型言語／純主要部後置型言語では一貫して主要部後置の語順の原理を優先し、SAE をはじめとする SVO 語順の言語では動詞と直接対象である目的語の近接の原理を優先する、という違いがみられる。

・4 節のまとめ

アルタイ型言語／接尾辞型言語の動詞複合体と接頭辞型言語の動詞複合体ではその性格が異なり、前者における文法カテゴリーは動詞語幹に近い方から、[Vstem-ヴォイス-アスペクト-テンス-モダリティ-人称]、のような順序、すなわちより客観的なものから、より主観的なものへとといった順序をとる。これに対し後者は、一般に主語と目的語の両方の人称を標示し、文の構造が凝縮したような構造を示す。

・5 節のまとめ

証拠性や認識的モダリティなど、スコープが広く、動詞複合体の外側に位置する必要がある文法カテゴリーの標示は、アルタイ型の言語では接辞などに文法化しているが、SVO 語順の言語ではいくつかの類型的な原因から生じる制約のため、文法化することが難しく、助動詞や語彙的要素によって標示される傾向がある。

・6 節のまとめ

アルタイ型言語は、照応型の言語と次のような諸点で対立する。

アルタイ型言語：拡散的・膠着的な語形成、修飾による標示、従属型

照応型言語：集約的・屈折的な語形成、一致による標示、同格型

具体的には、性の文法カテゴリーの存在が照応型の言語に偏っていることをみた。さらに複文の形成においても、アルタイ型言語は従属型の形成を行うのに対し、SAE をはじめとする SOV 型の言語では同格型の形成を行うことをみた。

・7 節のまとめ

アルタイ型言語では引用節が動詞に強く支配されている項（すなわち、直接目的語などの必須項）ではないために、直接話法と間接話法の境界があいまいで、同じ構造の文が二様に

解釈される傾向がある。

【謝辞】

本稿の草稿については、2019年7月13日に行われた「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2) 2019年度第1回研究会で発表し、その際に参加されていた先生方から有益な情報を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。貴重なコメントを下さった2名の匿名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。時間を割いて例文の適格性を判断し、作例もして下さるとともに貴重なコメントをくださったコンサルタントの方々にも深くお礼申し上げたい。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University press.
- Bybee, J. L. (1985) *Morphology, a study of the relation between meaning and form*. TSL 9. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Comrie, B. (1998) Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology. W. Boeder et al. (eds.) *Sprach in Raum und Zeit, In Memoriam Johannes Bechert*, Band 2, 19-37.
- Comrie, B. and T. Kuteva (2005) 122-123 Relativisation Strategies. *WALS*: 494-501.
- Corbett, G. G. (2005) 32. Systems of Gender Assignment. *WALS*: 134-137.
- De Haan, (2005) 77 Semantic Distinctions of Evidentiality. *WALS*: 314-317.
- ディクソン, R. M. W. (2018) 『能格性』 柳沢民雄・石田修一 (訳) 東京: 研究社 [Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.]
- Dryer, Matthew S. (2005a) 81. Order of Subject, Object, and Verb. *WALS*: 330-333.
- Dryer, Matthew S. (2005b) 85. Order of Adposition and Noun Phrase. *WALS*: 346-349.
- Dryer, Matthew S. (2005c) 86. Order of Genitive and Noun. *WALS*: 350-353.
- Dryer, Matthew S. (2005d) 88. Order of Demonstrative and Noun. *WALS*: 358-361.
- Dryer, Matthew S. (2005e) 87. Order of Adjective and Noun. *WALS*: 353-357.
- Dryer, Matthew S. (2005f) 90. Order of Relative Clause and Noun. *WALS*: 366-369.
- Dryer, Matthew S. (2005g) 84. Order of Object, Oblique, and Verb. *WALS*: 342-345.
- Dryer, Matthew S. (2005h) 26. Prefixing versus Suffixing in Inflectional Morphology. *WALS*: 110-113.
- 藤田保幸 (1988) 「引用論の視界」『日本語学 特集 引用』1988年9月号. 明治書院. 30-45.
- Haspelmath, M. (1998) How young is Standard Average European? *Language Sciences*. 20(3): 271-287.
- Haspelmath, M. (2001) Non-canonical marking of core arguments in European languages. A. Y. Aikhenvald, R. M. W. Dixon and M. Onishi (eds.) *Non-canonical marking of subjects and objects*. TSL 46: 53-83.
- Haspelmath, M., M. S. Dryer, D. Gil, and B. Comrie (eds.) (2005) *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press.
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社
- 廣瀬幸生 (1988) 「言語表現のレベルと話法」『日本語学 特集 引用』1988年9月号. 明治

書院. 4-13.

- 菱山湧人 (2018) 「タタール語」『語学研究所論集』23: 17-37.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について」宮岡伯人 (編)『北の言語；類型と歴史』241-260. 東京：三省堂
- 風間伸次郎 (2012) 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』2: 139-162.
- 風間伸次郎 (2014) 「日本語の類型について —「アルタイ型言語の解明を目指して—」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』4: 157-171.
- 風間伸次郎 (2017) 「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」北方研究教育センター(編)『北方人文研究』10: 3-33.
- 風間伸次郎 (2018) 「まえがき」『語学研究所論集』23: 17-37.
- 風間伸次郎 (2019) 「第6章 語順と情報構造の類型論」竹内史郎・下地理則 (編)『日本語の格標示と分裂自動詞性』143-178. 東京：くろしお出版
- 梶茂樹 (1998) 「スワヒリ語」東京外国語大学語学研究所 (編)『世界の言語ガイドブック』79-92. 東京：三省堂
- 栗林均 (1992) 「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第4巻』517-526. 東京：三省堂
- Lehmann, W. P. (1973) A structural principle of language and its implications. *Language*. 49: 47-66.
- Lehmann, W. P. (1978) *Syntactic typology: Studies in the phenomenology of language*. Austin: Univ. of Texas press.
- 南不二男 (1989) 「日本語 (現代日本語の輪郭)」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第2巻』1681-1692. 東京：三省堂
- 箕浦信勝 (1992) 「北アメリカの非アメリカ的言語：アサバスカ語」宮岡伯人 (編)『北の言語：類型と歴史』129-146. 東京：三省堂
- 宮岡伯人 (1989) 「チヌーク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第2巻』730-733. 東京：三省堂
- 宮岡伯人 (1992) 「環北太平洋の言語」宮岡伯人 (編)『北の言語：類型と歴史』3-65. 東京：三省堂
- 中川裕 J (1992) 「北西カフカース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第3巻』991-996. 東京：三省堂
- 中川裕 S (2003) 「日本語とアイヌ語の史的関係」アレキサンダー・ボビン／長田俊樹 (共編)『日本語系統論の現在』日文研叢書 31 国際日本文化研究センター 209-219.
- 奥田統己 (2015) 「アイヌ語の人称における「目的格」の優勢」アンナ・ブガエワ 長崎郁 (編)『アイヌ語研究の諸問題』札幌：北海道出版企画センター 27-36.
- 佐藤昭裕 (1986) 「第8章 言語の類型 —言語類型論—」『言語学を学ぶ人のために』176-197. 京都：世界思想社
- Siervierska, A. (2005) 102. Verbal Person Marking. *WALS*: 414-417.
- 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性について」『日本語学 特集 引用』1988年

9月号. 明治書院. 14-29.

Van der Auwera, J. and A. Amman (2005) 75. Epistemic Possibility. *WALS*: 306-309.

ヤコブセン ウェスリー・M. (2011) 「日本語における時間と現実性の相関関係—「仮定性」の意味的根源を探って—」『国語研プロジェクトレビュー』5. 1-19.

八杉佳穂 (1992) 「マヤ語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻』120-131. 東京：三省堂

米田信子・小森淳子・神谷俊郎 (2012) 「バントゥ諸語概説」 塩田勝彦 (編) 『アフリカ諸語文法要覧』151-155. 広島：溪水社

『語研論集』23号 : <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/contents/ronshuu.html> (最終閲覧日：2019年12月20日)

The Feature of Word-order and Some Correlated Features in Altaic-type Languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

In this paper, the author has examined some features in Altaic-type languages which can be correlate to each other. The summaries of each section are below.

•Summary of §1

First, Altaic-type languages are consistently head-final (genuine head-final) languages. Even if the word order is an SOV to some degree, there are languages where adjectives are postposed and some more where relative clauses are postposed. In such a situation, genuine head-final languages, where all the modifying elements are preposed, must show a few features with an internal relationship in many different points. This is a word-order feature in Altaic-type languages.

•Summary of §2

Altaic-type / genuine head-final languages and suffixing languages correlate to each other, which can be explained by Lehmann's general principle.

•Summary of §3

Among the following three expressions, (i) perception constructions, (ii) external / internal relative clauses, and (iii) the choice between a whole and a part in events toward (body-)parts, the principle of the head-final word order is consistently preferred in Altaic-type / genuine head-final languages, while the principle of approach of a verb and an object, which is directly affected by the event, is preferred in SVO languages like SAE

(Standard Average Indo-European languages).

•Summary of §4

Verbal complexes in Altaic-type / suffixing languages and those of prefixing languages have different characteristics. In the former, the order of grammatical categories is [Vstem-voice-aspect-tense-modality-person], i.e., arranged from more propositional ones to more modal ones. To the contrary, in the latter, verbal complexes generally mark both the person of a subject and an object, i.e., constructions where a sentence seems to be condensed.

•Summary of §5

Marking of some grammatical categories like evidentiality and epistemic modality, which has a larger scope and must be placed in the outer side of a verbal complex, has been grammaticalized into affixes, etc. in Altaic-type languages, while it can hardly be grammaticalized in SVO languages. In the latter, this is because of restrictions from some typological factors and grammatical categories tend to be marked by auxiliary verbs or lexical elements.

•Summary of §6

Altaic-type languages differ from Agreement-type languages in the following points.

Altaic-type languages contain a diffusive and agglutinating word formation, are marked by modification, and are of a subordinating type. Agreement-type languages contain an integrated and inflectional word formation, are marked by agreement, and are of an appositional type.

More precisely, the presence of genders as a grammatical category is biased in Agreement-type languages. In addition, in the formation of a complex sentence, Altaic-type languages use a subordinating type formation, while SVO languages like SAE use an appositional type formation.

•Summary of §7

In Altaic-type languages, a quotational clause is not a grammatical argument essential to the predicate. Therefore, the boundary between direct narration and indirect narration is ambiguous in such languages, and a sentence of the same construction tends to be interpreted in two ways.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)